Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-12

ジャン＝バティスト・カルポーの彫刻に関する考察 カルポーの二面性とその形成について

王，明明

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2015-03-25
(Date of Publication)
2016-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6351号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006351

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式４）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　王明明
専　　攻　人間表現
指導教員氏名　塚脇淳

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）
ジャン＝バティスト・カルポーの彫刻に関する考察
-カルポーの二面性とその形成について-，

論文要旨

彫刻家ジャン＝バティスト・カルポー/ Jean-Baptiste Carpeaux（1827-1875）はフランス彫刻史において、ロダン/Auguste Rodin（1840-1917）が出現する直前に活躍した重要な彫刻家である。彼は1827年にフランス北部の町ヴァランシェンヌ/Valenciennesに生まれ、1838年にパリへ移住した。その後、無料デッサン学校プティ・エコール/Ecole Gratuiteでの勉強を経て、フランスアカデミーと密接な関係を有するエコール・デ・ボザールに入学した。エコール・デ・ボザールで教育と訓練を受けた後、カルポーは1854年にローマ賞を獲得した。

筆者は大学院修士課程において、彫刻家ロダンについて考察を行い、その芸術の革新性について論述し、修士論文を作成した。その際、19世紀前半というロダンが活躍した前の時期に対して興味を抱いた。多くの美術様式が共存し、お互いに影響しあい、さらに次に現れる彫刻芸術の変革を予兆する時代でもあると筆者は考える。一方、19世紀前半から中期までの時期において、カルポーは社会での成功を収めた一人の彫刻家として、大きな注目を浴びた。彼は当時のフランス美術界で絶大な勢力を有するフランスアカデミーと深い関係を持つ。彼の作品は多くの争議も巻き起こしていた。彼の芸術の本質を解明することは、最終的に、19世紀前半という西洋彫刻の変革期の前夜にあたる時期の全貌を明確にすることとつながる。それゆえ筆者は修士課程修了後、カルポーについての考察と研究を始めた。

筆者がカルポーの研究を始めてから、カルポーに対してもっとも注目したのは、彼の人間性とその彫刻の表現の中に存在する二面性という特徴である。冒頭で紹介したように、カルポーはフランスアカデミーの専属的教育機関であるエコール・デ・ボザールで、その教育を受けた。19世紀前半のフランスにおいて、フランスアカデミーとの傘下に存在する教育機関のエコール・デ・ボザールや、美術展示組織のサロンは、当時の美術界の一大勢力として知られている。19世紀前半のフランスには、芸術家として生きていくために、もっとも有効な方法は、フランスアカデミーの教育を忠実に受け、その勢力下に身を置くことであった。さらに、長期的に安定した注文を確保するためには、過酷な修行を行ない、フランスアカデミーが設けたローマ賞を獲得するしかない。ローマ賞を獲得したカルポーはまさに、彫刻家としての成功を収めた一例であった。しかし、彼がフランスアカデミーの教育を受けた集大成として、ローマで制作した《ウゴリーノとその息子たち》はフランスアカデミーの教育において、推賞されない表現を取り入れた。カルポーのこのような教育経験と表現内容との不一致は彼の他の作品においても存在する。一方、彼がローマ賞を獲得した後、フランスアカデミーのイタリアでの教育拠点であるヴィラ・メディチで訓練を受けた。その期間中でも、カルポーはヴィラの教育方針に対して、反抗的な態度をとった。フランスアカデミーが主張する美術表現の基準を研究し、それに認められローマ賞の受賞者となったカルポーが、一方ローマでその教育方針に反抗したことは、その人間性における二面性の表れであろう。カルポーの美術表現及びその人間性に見られる二面性から、彼が当時において成功を収めた彫刻家でありながらも、自ら主流と相反するものに対して興味を抱き追求したことがわかる。またその形成の経緯について考察することによって、彼が受けた教育及び影響に存在する矛盾点が明らかになる。さらに、これらを取り囲む19世紀前半から中期のフランス社会における彫刻家の立場や生活の実態も垣間見えると考える。そこで、筆者は先行研究を踏まえて、カルポーの二面性及びその形成について分析を行なう。

本論文において、筆者はカルポーの生涯について、彼がフランスアカデミーの教育から卒業した時点を分岐点に、前半期と後半期に分けた。とりわけ今回はカルポーの生涯の前半期に着目して、上述したカルポーの二面性の本質とその形成の経緯について考察した。カルポーの二面性の形成の経緯を考察するにあたって、カルポーが生涯の前半において受けた教育を中心に、及びそれらを取り囲む19世紀前半のフランス、ないしヨーロッパ全土に現れた社会背景について調査しなければならない。そこで、筆者が主要参考文献として位置付けたのは、上述で挙げたアン・ミドルトン・ワグナーの著書「ジャン＝バティスト・カルポー：第二帝政の彫刻家」の第二章から第四章の内容である。以下、各章の内容を概観する。

ワグナーの著書の構成は冒頭で述べたようなものである。具体的には、第二章、Worker and artist/職人と芸術家において、著者はカルポーが受けた初期教育を中心に紹介し、考察した。ワグナー氏はカルポーが最初に受けた19世紀初期のフランス美術教育を全面的に調査し、その実態、特色及び発展について述べている。その中には、カルポーが教育を受けたヴァランシェンヌアカデミーとプティ・エコールが含まれる。また、19世紀初期というカルポーと直接関係がある時期のフランスの美術教育だけではなく、この時期の美術教育の根本的な基盤を成す要因についても、18世紀まで遡って調査と説明を行った。

第三章、Learning a language/表現の学習において、ワグナー氏は、カルポーがプティ・エコールを卒業後に入学した、フランスアカデミーの専属教育機関であるエコール・デ・ボザールでの教育について、紹介している。加えて、エコール・デ・ボザールとフランスアカデミーが生徒に対して、どのような表現を求めたか、そして、そのような表現のためにどのような教育法を実施したかについても詳細に論述している。

第四章、“Un défi à la sculpture”/“彫刻に対する挑戦”において、ワグナー氏は、カルポーがローマ賞の獲得後、イタリアへ赴き、そこで過ごした約五年間に着目した。フランスアカデミーのローマにおける拠点であるヴィラ・メディチに、毎年、パリのエコール・デ・ボザールでローマ賞を勝ち取った若者たちが集まって来る。彼らにとって、ヴィラはローマにおける聖地であり、そこでの勉強は名目上、芸術家としての成功にとって必須な訓練とされていた。しかし、実際のところは定かでない。それゆえこの点について複数の実例を取り上げ、検証した。

本論文の第三章では、上述したワグナー氏の著書の内容を踏まえて考察することで、筆者は

カルポーが生涯の前半で教育を受けた三つの主な教育機関であるヴァランシェンヌアカデミー、プティ・エコール、エコール・デ・ボザールの実態、及びそれと関連する社会背景を明らかにする。また、筆者はその中から、カルポーの二面性の形成にあたって、彼に影響を与えた要素を抽出して、お互いの関係を踏まえて、分析した。その分析によって、カルポーの二面性の本質及びその形成の経緯を明確にした。

論文の最後において、筆者は、カルポーの生涯の前半において、彼に影響を与えた要素を取り上げながら、19世紀前半の大きな時代背景を踏まえて、カルポーの二面性の本質とその形成の経緯をまとめた。また、カルポーの二面性が意味するのは、単に美術表現の自由を求めるカルポー個人と、新古典主義美術様式を19世紀初頭において形骸化に導いたフランスアカデミーとの間の矛盾ではない。それは19世紀前半という時期に、芸術家たちが新古典主義美術様式だけではなく、それより遥か古代から存続し続けた美術の形に対して、疑問を抱き、さらに、変化を求めるようになった表れである。19世紀という時代に、新旧の両方の勢力に巻き込まれ、その狭間で、揺れ動く彫刻家の思考と生活の実態が明らかとなる。

（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　名	王明明		
論文題目	ジャン＝バティスト・カルポーの彫刻に関する考察 カルポーの二面性とその形成について		
判　定	合　格・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	主　査	教授	塚脇　淳
	副　査	教授	鈴木幹雄
	副　査	准教授	岸本吉弘
	副　査	国際教育研究科教授	吉田典子
	副　査	兵庫教育大学学校教育研究科准教授	前芝武史

要　旨

本論文は１９世紀のフランス彫刻家ジャン＝バティスト・カルポーの表現に見て取れる二面性とその形成について考察し、カルポーの彫刻が持つ近代的な意義を論述した論文である。

カルポーはフランスアカデミーの専属的教育機関であるエコール・デ・ボザールで、その教育を受けた。19世紀前半のフランスにおいて、フランスアカデミーの傘下に位置する教育機関のエコール・デ・ボザールや、美術展示組織のサロンは、当時の美術界の一大勢力として知られている。19世紀前半のフランスでは、芸術家として生きていくために、最も有効な方法は、フランスアカデミーの教育を忠実に受け、その勢力下に身を置くことであった。さらに、長期的に安定した注文を確保するためには、過酷な修行を行ない、フランスアカデミーが設けたローマ賞を獲得しなければならなかったカルポーはまさに、その一例であった。しかし、彼がフランスアカデミーの教育を受けた集大成として、ローマで制作した《ウゴリーノとその息子たち》はフランスアカデミーの教育では推賞されない表現を取り入れたものだった。カルポーのこのような表現内容と教育経験との不一致は彼の他の作品においても存在する。そこで、当執筆者は第二章で、先行研究である、アメリカ美術学者アン・ミドルトン・ワグナーの著書「ジャン＝バティスト・カルポー：第二帝政の彫刻家」の第二章から第四章の内容を踏まえて、カルポーの表現に見て取れる二面性及びその形成について考察を行なった。

そしてさらに、第三章で、その表現を二分的に分析するのみならず、一人の個人を取り巻く、その時代の立場からも改めて考察した。終章では、カルポーの人間像を統合的に考察した上、彼が絶えず追求し続けたものについて分析した。それによって、「手段を択ばない逞しさ」「対象に迫ろうとする激しい表現欲」「人々の日常のあるがままを求める目線」の三視点を抽出し、論証した。

カルポーの二面性が意味するのは、単に美術表現の自由を求めるカルポー個人と、新古典主義美術様式を19世紀初頭において形骸化に導いたフランスアカデミーとの間の矛盾ではなく、それは19世紀前半という時期に、芸術家たちが新古典主義美術様式だけではなく、それより遥か古代から存続し続けた美術の形に対しても、疑問を抱き変化を求めるようになった表れであり、19世紀という時代に、新旧の両方の勢力に巻き込まれ、その狭間で、揺れ動く彫刻家の思考と生活の実態が本論文によって明らかとなった。

本論文は以下の点で評価できる。

１、フランス１９世紀前半という先行資料が少ない時代に着目し、その時代に活躍した彫刻家カルポーについて、緻密に考察した。先行研究の中で言及されることのなかった「二面性」という特徴の形成について論述した上、その中に潜む美術の近代化の現れを予兆する萌芽を明らかにした。（独自性）

２、主要参考文献を詳細に調査した上、その内容を単にまとめるのではなく、その中から重要なポイントを抽出し分析を行なった。その分析を最終的に終章へ導き、正確な理論の展開を見せた。（論理性）

３、フランスでの現地調査で入手した資料と、本論で考察したその教育課程の内容を踏まえて、論文で提起した二面性とその形成が終章において生き生きと立証されている。（実証性）

４、西洋彫刻史に於いてこの時代を扱った研究は非常に稀有なものであり、美術史学全体から見ても当該時代は空白に近い状況であることから、本研究は相応の価値があるものと判断される。（専門的・学術的価値）

５、権力への迎合と自らの追求の狭間で揺れ動く、芸術家の苦悩と生き様が生き生きと描き出されており、芸術表現する人間の研究という（人間表現学にふさわしい）特徴を有している。

（「人間発達環境学」にふさわしい特徴）

レフェリー付き論文

大学美術教育学会平成22年度学会誌掲載「ジャン＝バティスト・カルポーの肖像彫刻に関する考察」No.43　P.439-446

神戸大学人間発達環境学研究科研究紀要 2014年9月出版掲載「ジャン＝バティスト・カルポーの彫刻《ウゴリーノ》に関する考察―カルポーの一つの挑戦について―」第8巻第1号 P.85-95

以上、本論文はジャン＝バティスト・カルポーの彫刻について、独自の視点と緻密な方法で研究したものであり、近代彫刻研究において重要な知見を得たものとして価値あるものである。

よって、学位申請者の王明明は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。